国際協働学習への校種別取り組み比較
―活動のねらいと成果の観点から―

School type of approach compared to international collaboration learning.
― In terms of outcomes and aim of the activity ―

清　水　和　久
Kazuhisa SHIMIZU

〈要旨〉

Japan Artmileによる国際交流壁画共同制作プロジェクトは，毎年全国規模で実施されており，参加校は徐々に増えてきている。しかし，小学校での取り組みの事例は比較的多くあるものの，中学校や高等学校では事例はまだ少ない。そこで各校種の実態を知るために，校種別に調査を行い，参加しているグループの枠組みや実施時間枠，取り組みのねらいや成果について調査を行った。その結果，中学校では，授業ではなく課外の美術クラブ単位での取り組み，高等学校では，選択美術や国際理解などの総合的な学習の時間で取り組まれていることがわかった。また，校種により，教師のねらいはそれぞれ異なっているが，「異文化理解」，「自文化理解」よりも「協働する力」「表現力」がついたと認識する学校が多いことがわかった。これはプロセスも含めて最終的に成果物を作るという活動が寄与していると思われる。今後は，「協働する力」「表現力」の獲得に最初から意識的に取り組むことによって，小中連携をも見通した効果的なアプローチが可能になると考える。

＜キーワード＞
国際協働学習，教育評価，協働する力，表現力

1　はじめに

国際交流共同壁画制作プロジェクトは2006年から実施されており，2012年度で７年目になる。Japan Artmile [1] が，全国の小学校，中学校，高等学校，大学に呼びかけ，参加校は，書類審査を経て決定される。筆者の大学がある石川県においても，増減はあるが毎年５，６校の小学校（10クラス程度）がこのプロジェクトに参加し，外国の学校と共同で壁画を作成している。筆者は石川県から参加している教師に対して毎年アンケート調査を行っている。ねらいとしては「異文化理解」，「コミュニケーション力」や「協働作業力」の向上を目指して行う教師が多い。[2]，今回は平成24年度にこのプロジェクトに参加した全国の小学校，中学校，高等学校に対象を拡大して，各校ごとに取り組んでいるグループの属性や枠組みの時間科目，ねらいや成果などを比較する。

2　研究の方法

2－1　調査対象校

平成24年度の国際交流壁画制作プロジェクト参加国

小学校　　40グループ
中学校　　９グループ
高等学校　　９グループ

グループ数は壁画を作成したグループであり，同じ学校でも，クラスが違い，相手国が異なる場合は異なるグループとして数えるものとする。

2－2　調査対象内容

以下の項目について調べ，校種別に比較する

１）校種，グループの属性
２）プロジェクトの学習目標
３）プロジェクトを実施しての成果

2－3　調査方法

２）のプロジェクトの学習目標については９つの項目について，目標としてもっとも重視したものを５位まで順位をつけることによって判断する。

また，３）のプロジェクトを実施しての成果は，９つの項目について教師の主観的な手応えとして５段階で評価し

てもらうことで判断する。

この９つの項目は，知識理解として「自文化の理解」「異文化の理解」の２つ，関心・意欲・態度として「学習を追究する力」，技能として，「コミュニケーション力」「情報活用能力」「人間関係力」「協働する力」「表現力」「作品を鑑賞する力」の６つである。(3)

表１　質問項目

つけたい力指導目標	重視	先生の手応え	理由（文で記述）
自文化の理解		54321	
異文化の理解		54321	
コミュニケーション力（説明･共感･英語）		54321	
情報活用能力（情報収集。発信）		54321	
人間関係力（学級内，交流相手）		54321	
協働する力（役割分担・協力）		54321	
学習を追究する力		54321	
表現力（伝えたいことを絵で表す）		54321	
作品を鑑賞する力		54321	
		54321	

3　研究の結果

１）校種，グループの属性

表２　校種別参加グループの属性

	授業	部など課外	その他	合計
小学校	33	6	1	40
中学校	1	7	1	9
高　校	5	3	1	9

小学校の内訳は，１年２クラス，３年２クラス，４年６クラス，５年７クラス，６年18クラスである。小学校では，英語活動が実施されている高学年が多くなる傾向にある。また課外部とは，クラブ活動が５つ，委員会活動が１つであった。

中学校の内訳は，３年の授業として取り組んだものが１つ。この学校は中高一貫教育校であり，中学校３年生で取り組んでいる。その他の所はすべて美術部である。

高校の内訳は，５つのクラスの内，３クラスは選択美術として，後の２クラスは総合として「国際理解」，英語科として「異文化理解」という中で授業として実施している。その他美術部として３グループである。

小中高にあるその他の１は，このプロジェクトを実施しているJAPAN ARTMILEとして学校ではない組織で行ったものである。

このようにして見てみると，小学校では圧倒的に授業の中で取り組まれているのに対して，中学校では授業として取り組んでいる学校は中高一貫校の１つだけで，あとは課外の部活動として取り組まれている。また高校では，選択美術や英語における国際理解，総合などの特別の科目を作ってではあるが，授業カリキュラムの中で実施されているところもある。小学校の場合は学級担任制のため，比較的クラス単位で取り組みやすく，総合的な学習の時間だけでなく，国語や社会，図工，英語などに振り分けて柔軟に対応できている。しかし，中学校になると教科担任制であり特定の科目で取り組む事の困難さがあり，ほとんどが美術部の活動となっている。高校では，科目として特徴を出せる所では授業として取り組まれている。

２）プロジェクトの学習目標

小中高別に，学習目標とする項目についてベスト５の内１，２位のみを積み上げ棒グラフで表示する。

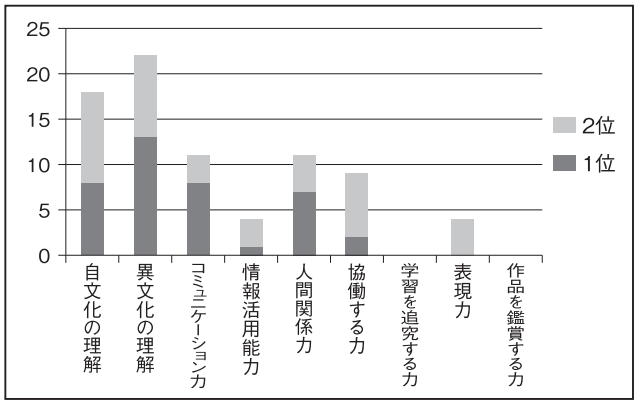

図1　項目別学習目標ベスト2位（小学校）（n=40）

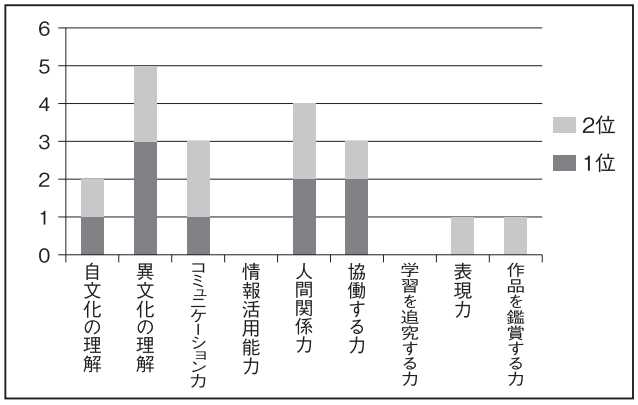

図2　項目別学習目標ベスト2位（中学校）（n=9）

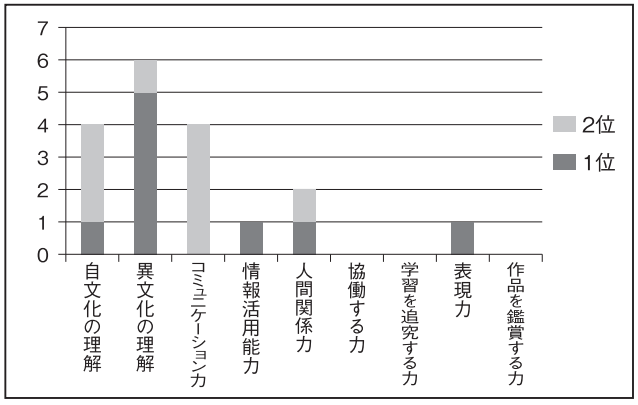

図3　項目別学習目標ベスト2位（高校）（n=9）

小学校では，教師がつけたいと思う力は，１位「異文化理解」と２位「自文化理解」，３位「コミュニケーション力」４位「人間関係力」であった。

中学校では，１位「異文化理解」，２位「人間関係力」，３位「コミュニケーション力」「協働する力」であった。

高校では，１位「異文化理解」，２位「自文化理解」「コミュニケーション力」であった。

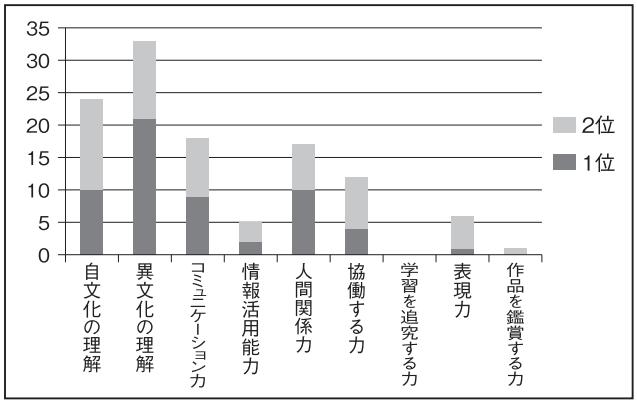

図4　項目別学習目標ベスト2位（小中高校）（n=58）

小中高の合計では，１位「異文化理解，２位「自文化理解」，３位「コミュニケーション力」，４位「人間関係力」であった。

ここから読み取れることは，外国の児童生徒との交流であるので，教師のねらいとしては異文化理解が１位に来るのは当たり前である。小学校では２位に同じく自文化の理解をねらっているが，中学校では，「人間関係力」が２位になっている。また，コミュニケーション力や協働する力の役割分担なども多い。これは中学校の場合，美術部としての参加が多い為と思われる。美術部は日常的には個人で絵を描くなどの個人作業をすることが多いと思われるが，このプロジェクトに参加するにあたって，人間関係を切り結ぶことに教師の期待が表れていると考えられる。高校においては，第１希望としての「異文化理解」へのねらいがとても高いことが読み取れる。また，あまりねらいとして教師が期待していないものは，鑑賞力，学習追究意欲，情報活用能力などであった。

３）プロジェクトを実施後の成果

最後に９つの項目について，プロジェクト実施後に５段階の評価を行っている。実際は９つのすべての項目について５段階で達成度を評価してもらっているが，より特徴を明確にするために各項目について５及び４と評価された項目のみを集計して表示する。（評価５大変手ごたえがあった。評価４手ごたえがあった。）

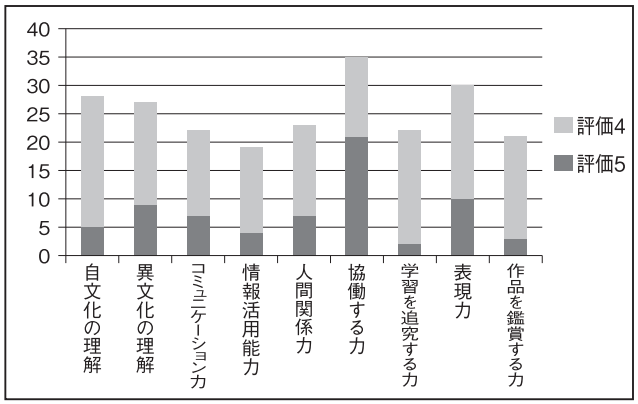

図5　項目別教師の手応え（小学校）（n=40）

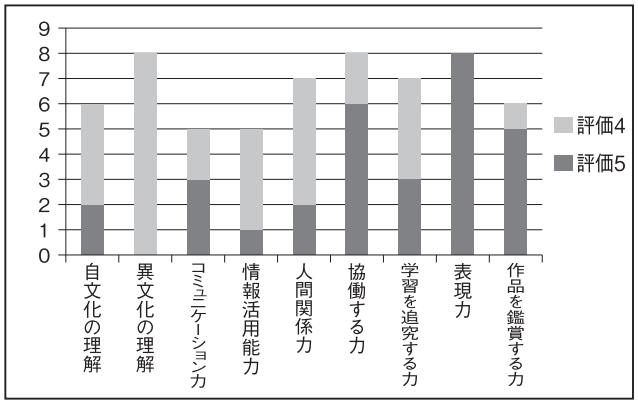

図6　項目別教師の手応え（中学校）（n=9）

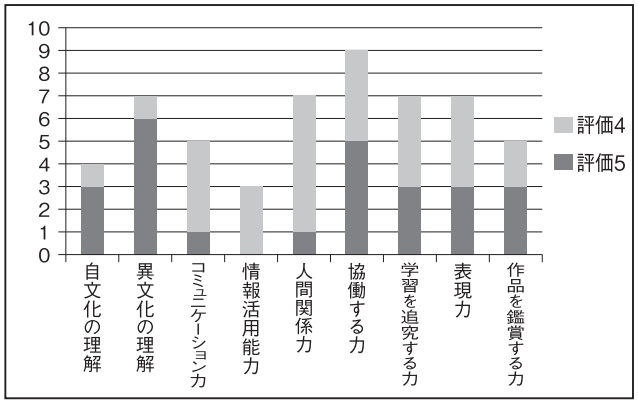

図7　項目別教師の手応え（高校）（n=9）

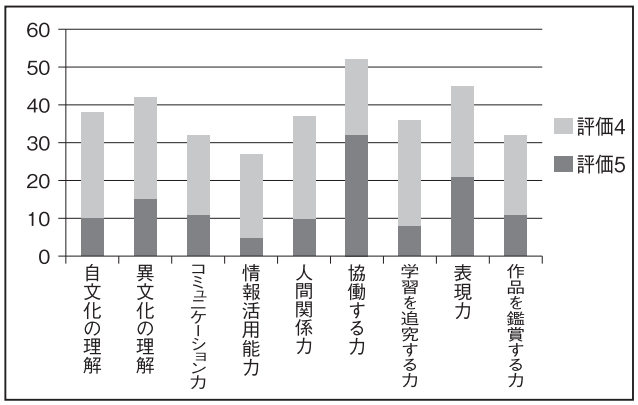

図8　項目別教師の手応え（小中高校）（n=58）

小学校においては，教師の手応えとして成果があったものは，１位－協働する力，２位－表現力，３位－自文化理

解，４位－異文化理解であった。

中学校では，１位－表現力，２位－協働する力，３位－異文化理解，４位－学習追究力であった（同数の場合は５の評価が多いものを優先）

高校では，１位－協働する力，２位－異文化理解，３位－学習追究力，表現力。

小中高の合計では，１位－協働する力，２位－表現力，３位－異文化理解，４位－自文化理解であった。

このことから，小中高のどの校種でも，「協働する力」がついたことに教師は手応えを感じていることになる。また，表現力もどの校種にも成果として表れている。

4　研究の考察

4－1　事前の学習目標と成果の比較

表３　小学校における学習目標と成果の相違

	事前の学習目標	事後の成果
１位	異文化理解	協働する力
２位	自文化理解	表現力
３位	コミュニケーション	自文化理解
４位	人間関係力	異文化理解

表４　中学校における学習目標と成果の相違

	事前の学習目標	事後の成果
１位	異文化理解	表現力
２位	人間関係力	協働する力
３位	協働する力	異文化理解
４位	コミュニケーション	学習追究意欲

表５　高校における学習目標と成果の相違

	事前の学習目標	事後の成果
１位	異文化理解	協働する力
２位	自文化理解	異文化理解力
３位	コミュニケーション	学習追究意欲・表現力
４位	人間関係力	

表６　小中高における学習目標と成果の相違

	事前の学習目標	事後の成果
１位	異文化理解	協働する力
２位	自文化理解	表現力
３位	コミュニケーション	異文化理解
４位	人間関係力	自文化理解

このように一覧にしてみると小中高共通して，プロジェクト実施前は，教育目標として異文化理解，自文化理解が教師のねらいとして上位にあったのであるが，実施後教育効果として高いと教師が感じたのは「協働する力」「表現力」であった。なぜそのような結果になったのかを考察してみたい。その為には成果の５段階の記述に際して同時に教師によって記入された理由を参考にする。

異文化理解，自文化理解に関しては，相手との連絡の頻度により十分できたグループもあれば，できなかったグループもある。また事前に想定しておいた異文化理解の深さにおいて教師の想定よりも理解度が低い場合には評価は厳しくなる。一方当初はあまり成果として期待していなかった「協働する力」「表現力」に関しては，ゴールとして壁画を作成するという作業が設定されているので，必ず行わなければならない。また壁画は１人で描くことは不可能なので，必ず協力し，役割を分担する必然性が出てくる。「協働する力」の理由を見てみると「納得のできる出来映えの絵を仕上げるためにはみんなが協力して作らねばならないことを実感していた（小１）」「クラス内で下描きや彩色などを役割分担して協力し合った（小６）」「自分達で色の分担を決めて進んでいる塗りできた（小５）」等の理由が書かれていた。

つまり最初から期待されている「異文化理解」や，「自文化理解」はグループによって差が大きいが，「協働する力」，「表現力」は，壁画を必ず完成させるために必要な取り組みなので校種による差はさほどないことになる。

4－2　「協働する力」「表現力」を評価対象にする

今回の調査で「協働する力」「表現力」に対して高い学習成果が得られることがわかった。多くの教師は「協働する力」や「表現力」を当初はあまり意識しないでおこなっている現状が明らかになった。このプロジェクトは国際協働学習プロジェクトである。それ故に知識理解としての「異文化理解」，「自文化理解」に焦点が行きがちであるが，技能としての「協働する力」「表現力」に，プロジェクトのスタートから焦点を当て取り組む事で，学習成果をより可視化できると考える。技能であれば，発達段階に応じたステージを考える事でどの校種でも取り組む事が可能である。特に中学校，高校では授業で取り組む事が難しい状況であるが，小学校でついた力をさらに発展させるという意味で，小中高とつながった国際協働学習の評価項目を考えるヒントになると思う。

5　研究の結論

この国際協働学習のプロジェクトにおいては，「協働する力」「表現力」が，最初から教師のねらいとしていた「自文化理解，異文化理解」の成果よりもより強く児童生徒に身についたと教師が認識したということがわかった。これはこのプロジェクトが，制作過程において共同で話し合い，最終的な成果物として壁画を作成するというプロセスを持

っているためだと思われる。これは文部科学省のねらいとする「協働的な学び」にもつながる部分である。

最初から教師があまり期待しなかったことが，結果的にはどの校種においても成果として認められたことになる。そうであれば，最初から教師が「協働する力」「表現力」をつける活動を限定して設計し，評価する場面を意識的にプロジェクトの中に埋め込むことで，さらに効果的に成果を可視化できると思われる。

6　今後の課題

「自文化理解，異文化理解」は，小学校，中学校，高等学校の校種，授業として取り組むのか部活動として取り組むのかの参加グループの属性，および相手国に関する情報量や相手国の教師の積極性によって，その理解の質が左右される。しかし，結論でも述べたように小中高と校種が違っても，「協働する力」「表現力」に関しては共通に効果があると教師は感じていることから，今後小中高で校種によっていくつかの段階に分けて評価の観点を決めて実践して行くことによって，同じプロジェクトで同じ視点で発達段階に即したスキルを明らかにすることできると考える。また，国際協働学習を設計する段階で評価の観点にこの２つのスキルを必ず入れ込み，「自文化理解，異文化理解」の観点も含めて評価する方法を明らかにしておくことで，児童生徒の変容をより詳しく記述することが可能になると思われる。

国際協働学習において，どのような成果があるのかを具体的に提示していくことが今後同種の取り組みを広げていく上で重要になってくると思われる。

注

(1) Japan Artmile　URL http://www.artmile.jp/
(2) 清水和久　金沢星稜大学年報　No.33 PP.31－PP361成果共有型国際交流学習を対象としたカリキュラム開発と評価
(3) ジャパンアートマイル実行委員会　代表塩飽敦子　2012年度実践報告集　アートマイル国際交流壁画プロジェクト